

国語科学習指導案

八尾市立八尾小学校

指導者 岡本 大輝

1. 日 時 令和6年11月22日 第5時限 14:00~14:45
2. 場 所 第1学年1組教室
3. 学年・組 第1学年1組(29名)
4. 単 元 名 「せつめいする文しょうをよもう」「せつめいする文しょうをかこう」
教材文:「じどう車くらべ」「じどう車ずかんをつくろう」(光村図書)
5. 単 元 目 標

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
・事柄の順序など情報と情報との関係について理解することができる。 【(2)ア】	・事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えることができる。【C 読むこと(1)ア】 ・文章の中の重要な語や文を考えて選び出すことができる。【C 読むこと(1)ウ】 ・事柄の順序に沿って簡単な構成を考えることができる。【B 書くこと(1)イ】 ・文章の内容と自分の体験とを結び付けて、感想をもつことができる。【C 読むこと(1)オ】	・言葉がもつよさを感じるとともに、楽しんで読書をし、国語を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。

6. 本単元で取り組む言語活動

事物の仕組みを説明した文章を読み、「じどう車ずかん」を作る。

7. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①事柄の順序など情報と情報との関係について理解している。【(2)ア】	①「読むこと」において、事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えている。 【C 読むこと(1)ア】 ②「読むこと」において、文章の中の重要な語や文を考えて選び出している。 【C 読むこと(1)ウ】 ③「書くこと」において、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えている。【B 書くこと(1)イ】 ④「読むこと」において、文章の内容と自分の体験とを結び付けて、感想をもっている。 【C 読むこと(1)オ】	・粘り強く文章の中で大事な言葉を押さえながら読み、学習課題に沿って分かったことを伝えようとしている。

8. 指導にあたって

(1) 児童観

本学級の児童は、説明的な文章については「つぼみ」「うみのかくれんぼ」を学習してきた。

「つぼみ」では、一つひとつの言葉と挿絵を対応させて内容の大体を捉える学習を行った。初めて説明文に触れた児童は、同じ「つぼみ」でも、じっくりと視点を当てると一つひとつ違うつぼみに興味を持ち、言葉や挿絵を追いかけながら読んでいた。また、説明文の基本的な文型「問い—答え」を学び、文末表現を手がかりに「問い」を見つけ、その問いに対する「答え」を確認しながら読み進めることができた。

「うみのかくれんぼ」では、「つぼみ」と同様に一つひとつの言葉と挿絵を対応させて内容の大体を捉える学習を繰り返し行った。「うみ」や「かくれんぼ」は児童にとって身近な自然や遊びであるため、興味を持って生き物の名前・隠れている場所・体の特徴・隠れ方を探すことができた。また、単元の最後に、「『かくれんぼ名人』を探して、伝え合う」という言語活動を設定することによって、「どの生き物が一番かくれんぼ名人か」を自ずと考え、「つぼみ」では、まだ難しかった事例の比較も行えるようになってきた。さらに、三つの生き物を比較することによって、「どの生き物が一番かくれんぼ名人か」を自分なりに考え、根拠と理由を書くことができるようになってきた。

これらの学習を進めていく中で、教材文から「問い」と「答え」を見つけ、重要な語や文を考えて選び出して書き、内容の大体を捉えることはできてきた。しかし、児童の中には文章を書くことにおいてはまだ苦手意識をもつ児童がおり、特に自分が思っていることや考えていることを言葉にすることが難しいと感じている。そこで、書くことへのハードルを少しでも下げるために、本単元でもワークシート「じどう車しょうかいカード」を使用することによって、文の構成を捉えやすくさせていきたい。

(2) 教材観

1年上巻「うみの かくれんぼ」と同様、「問い+答え+答え+答え」という列挙型の構成になっている説明文である。「どんな仕事をするのか」、そのために「どんなつくりになっているのか」という具合に、問いが二つあるため、「しごと」と「つくり」を二つの段落に分けて書かれている明確な構成である。さらに、「それぞれの じどう車は、どんな しごとを して いますか。」「その ために、どんな つくりに なって いますか。」という二つの問いの文に対して、三つの事例を挙げながら説明していく文章である。説明の順には「しごと」→「つくり」という一定の型が見られる。

既習の「つぼみ」や「うみの かくれんぼ」と比べて特徴的なのは、二つの問いの間に因果関係が見られる点である。どの事例においても「しごと」に合わせた「つくり」が説明されている。答えの文では、「しごと」と「つくり」を「そのために」という言葉がつなげている。「しごと」は1文で、「つくり」は2文で説明されている。「つくり」の説明の1文目には、なぜその「つくり」にする必要があったのか、詳しくは説明されていないが、2文目には、多少その「つくり」にした意図が説明されている。説明されていない部分に関しては、児童に考えさせることで、理解が深まることが期待できる。

また、「しごと」「うで」「あし」など、自動車を擬人化した説明が複数見られ、文章の下部にはそれぞれの自動車の挿絵がある。読み手に理解してもらおうという書き手の説明の工夫であることを捉えさせられる。

「せつめいする文しょうをかこう じどう車ずかんをつくろう」においても、図書室で図鑑をよく目に見ている児童にとって、興味をもちやすい題材といえる。また、三つの事例で、「しごと」と「つくり」に着目して学習を進めていくので、「しごと」と「つくり」に着目して情報を集め、構成を考えることにも抵抗が少ないと思われる。教材文には、挿絵や作例もあり、学習の見通しや目標がもちやすい。P34には「しごと」と「つくり」を整理する例がある。図鑑や絵本などは、「しごと」と「つくり」ごとに記述があるわけではないので、取り出した情報をどちらに書くのかを考え、どれとどれを記述するのか判断する際に活用できる。

児童が単元の初めから、単元の終わりには自分の「じどう車ずかん」を作るということを念頭に置いて学習を進めていくことによって、事例の順序・説明の順序とその因果関係など、順序立てて情報を整理して書くという書き手の立場に立った書き方が自ずと鍛えられる。そして、今後説明する文を書く際に、読み手に分かりやすく伝えるためのこれらの説明の工夫や技法を活かすことにつながる。

(3)指導観

第1次では、「じどう車くらべ」で紹介されている事例の自動車が何を比べているのかを子どもたちに興味を持って予想させるために、身近な自転車等を例に挙げてつくり注目させる。大体の児童が自動車の「しごと」については、イメージを持っていることが予想できるものの、「つくり」については曖昧な知識の児童もいると考えられる。教材文の初読後には、「つくり」も紹介されていたことを確かめ、自動車ごとに「しごと」と「つくり」をまとめていこうという課題意識をもたせていくようにする。

第2次では、「じどう車くらべ」において、今回初めて問いの文が2文あることに文末表現から気づかせる。答えを正確に捉えるためには、教科書本文の情報から適切な言葉を選び出すことが重要になる。教科書本文にある「しごと」や「そのために」というキーワードに着目し、カードにまとめることで、文章の構成を捉えさせ、問いに対する答えの確認もさせていきたい。また、自動車どうしの「しごと」を比べることで、それぞれの自動車の仕事に応じた「つくり」の違いに気づかせたい。「じどう車ずかんをつくろう」の単元に入る前には、「しごと」にあった「つくり」を見つけることの重要性について理解させるために改めて取り上げたい。例として、「はしご車」を取り上げると、車体が赤いことも、はしごが伸びることも「つくり」である。しかし、「災害時に人を救出する」ことを「しごと」とした場合、「つくり」として紹介すべきことはどちらか、選択できる力を育てたい。「ハンドルがあること」や「タイヤがついていること」は、全ての自動車の共通事項であり、「しごと」独自の「つくり」ではないことも合わせてここで確認しておく。

第3次では、「じどう車ずかんをつくろう」の学習のために、まず図書室にある自動車図鑑から好きな自動車を1つ選び、集めたたくさん情報からふさわしい情報を取捨選択させて、「じどう車カード」を作成する。そして、自分の「じどう車ずかん」を完成させる。また、今回の「ずかんづくり」では、どのような順序にすればよいのかを子どもたちそれぞれに考えさせたい。そのため

に、自分で作成した「じどう車カード」を教材文の自動車の中にただ入れるだけではなく、自分の考えに合った順序も自ら考えて図鑑を完成させる活動を行う。その際、なぜその順序にしたのかという理由も説明させるようにする。その活動から、それぞれの考えによって順序も変わってくることに気づかせたい。順序についての理解が困難な児童がいることも想定し、この活動に入る前に教師が例を示し、実際にカードを動かして視覚的な支援を行う。次に発展的な学習として、グループで「じどう車ずかんをつくる」という活動を設定した。ここでの言語活動では、それぞれ作成した「じどう車カード」をグループで持ち寄り、題名と順序を考えさせながら図鑑作りを行う。一人の意見が優先されることがないように、グループ内のすべての児童が自分の考えた順序を提示する時間を確保する。そのことによって自分の考えを伝えることに苦手意識を持つ児童も必ず参加できるようにさせたい。題名に合った「じどう車ずかん」を作るために「じどう車カード」を並べ替える活動を通して、事例の順序を工夫できることや自分も書き手となる楽しさを知ってほしい。

9. 単元の指導と評価の計画（全12時間）◎…記録に残す評価 ○…指導に生かす評価

次	時	主な学習活動	知技	思判表	主体	評価規準・評価方法
1	1	・題名や写真から「自転車や自動車」を想起し交流する。 ・どんな自動車が出てきてなにを比べているのか予想する。【本時】		○	○	・「読むこと」において、文章の内容と自分の体験とを結びつけて、感想を持っている。 【思・判・表】④（発言・記述）
2	2	・範読を聞き、問いの文や、出てきた自動車を確認かめ、文章全体の構成を捉え内容の大体を捉える。	○	◎	○	・「読むこと」において、事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えている。 【思・判・表】①（発言・観察）
	3	・それぞれの自動車の「し	○	○	○	・事柄の順序など情報と情報との関係について理解している。【知・技】①（発言・記述） ・「読むこと」において、文章の中の重要な語や文を考えて選び出している。 【思・判・表】②（発言・記述）
	4	ごと」と「つくり」を読み取り、カードにまとめる。	○	○	○	
	5		○	○	○	
	6	・それぞれの自動車の「しごと」と「つくり」を比較し、共通点や相違点を見つける。	○	○	○	・事柄の順序など情報と情報との関係について理解している。【知・技】①（発言・記述） ・「読むこと」において、事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えている。

	7	・はしご車の「しごと」と「つくり」を考え、ノートにまとめる。	○	◎	○	<p>【思・判・表】①(発言・記述)</p> <p>・「読むこと」において、文章の中の重要な語や文を考えて選び出している。</p> <p>【思・判・表】②(発言・観察)</p>
3	8	・本の中から自分たちの自動車を1台ずつ選ぶ。			○	<p>・事柄の順序など情報と情報との関係について理解している。【知・技】①(発言・記述)</p> <p>・事柄の順序に沿って簡単な構成を考えることができる。</p> <p>【思・判・表】③</p> <p>・「読むこと」において、文章の内容と自分の体験とを結び付けて、感想をもっている。</p> <p>【思・判・表】④(発言・記述)</p> <p>・粘り強く文章の中で大事な言葉を押さえながら読み、学習課題に沿って分かったことを伝えようとしている。【主】</p>
	9	・自分の自動車の「しごと」と「つくり」をカードにまとめる。	○	○	○	
	10	・各自、「じどう車ずかん」を作る。	◎	◎	◎	
	11	・グループで「じどう車ずかん」を作る。	◎	◎	◎	
	12	・「じどう車ずかん」の交流をし、感想を伝え合う。		○	○	<p>・「読むこと」において、文章の内容と自分の体験とを結び付けて、感想をもっている。</p> <p>【思・判・表】④(発言・記述)</p>

10. 本時の展開(1/12 時間目)

(1) 本時の目標

- ・文章の内容と自分の体験とを結び付けて、感想をもつことができる。

(2) 本時の評価規準

- ・「読むこと」において、文章の内容と自分の体験とを結び付けて、感想をもっている。

【思・判・表④】

(3) 展開

主な学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法
1. 先生が学校に乗ってきた乗り物を紹介する。	・足けり乗用玩具、マウンテンバイク、自転車、車など。	
2. クイズをする。	・誰が一番速いか考えさせる。	
3. なぜ違うのか、どこが違うのかを考える。	・違いに目を向けさせながら、「つくり」と、その理由について考えさせる。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> どんなじどう車が出てくるのか、よそうしよう。 </div>		
4. 学習内容を知る。 どんな車が出てくるか考え、何を比べているのか予想する。	・どんな車が出てきそうか考え、知っている車について、何を比べているのか予想させる。	・「読むこと」において、文章の内容と自分の体験とを結びつけて、感想を持っている。 【思・判・表】④ (発言・記述)
5. じどう車ずかんを作ることを知り、本時を振り返る。		

(4) 本時の判断基準

本時における具体的な児童の状況（※本時の評価基準にかかわる場面において）

おおむね満足できる状況(B)	努力を要する状況(C)への支援
どんな自動車が出てくるか身近な経験を結び付けて考え、それを友だちに伝えようとしている。	身近な乗り物についてふれておく。また、教科書の挿絵にふれておく。